

## 受賞の言

うえはら けんぜん

67年琉球大卒、74年九州大大学院文学研究科博士課程中退。01年九州大より博士号（文学）取得。宮崎大助教授などを経て、96年より岡山大教育学部教授。09年に退職。同大名誉教授。44年生まれ。



## 近世国家の貿易システムを攪乱する周縁

岡山大学名誉教授 上原 兼善

近世の幕藩制国家は外国に対する窓口を長崎口・対馬口・薩摩口（琉球口）・松前口という4つの口に限定し、日本人の出入、貿易の管理統制を行う、いわゆる「鎖国」（海禁）体制を布いた。長崎口を貿易のメインルートとし、対馬口と薩摩口（琉球口）がこれをサブルートとして補い、蝦夷地を松前藩が押さえとするシステムである。しかしそれぞれの口の維持は貿易を前提としていたがゆえに、時として自己運動をみせ、あるいは外からの危機を媒介する場にもなりえた。本研究ではそのことを薩摩口を通じて例証しようとした。

18世紀後期になって、サブルートの一つである対馬口の対朝鮮貿易は貨幣改鋳、朝鮮人参貿易の不調を背景に衰退をきたす。いっぽう琉球口の進貢貿易もこの頃島津氏の財政難もあって同様退潮を示すが、しかし後期になって、薩摩藩は長崎本来の本方商売と別口に琉球唐物を入札させる、いわゆる長崎商法の途を開くことに成功する。それはやがて長崎の本方商売を攪乱し、幕府の長崎口を通じた貿易の管理統制を危うくしていった。

薩摩藩の長崎商法は長崎貿易に大きなゆがみをもたらしただけでなく、松前口にもまた影響を与えた。昆布を中心とする北国産の輸出用海産物が、新潟などの諸湊を経て南下するルートが密かに形成され、逆のルートをたどって琉球口の輸入唐物が日本海を登っていった。すなわち琉球口は長崎・対馬口貿易の代替機能を強くし、松前口をもたぐり寄せる構造をみせることになる。そして長崎口に蛭のように食い込んだ薩摩藩の長崎商法は、また資金的には琉球特産品の専売、輸入唐物の買ったとき、昆布のほか輸出用海産物の売り込みというかたちで、琉球市場に寄生して展開されるという特徴をもった。それゆえに、内部に琉球側の反発を抱え込み、それは様々なかたちをとって表面化していく。

本研究は幕藩制国家の根幹にかかわるような問題と切り結んだものではなく、琉球という周縁に焦点を当てたテーマ的にもいわばマイナーな研究である。それが、こうした価値ある賞の対象となったことは光栄というほかない。今後もこの感激を忘れず、また新たな研究テーマに挑戦して行きたい。